

ダルクローズ・アイデンティティ

専門課程に於けるジャック＝ダルクローズリトミックの理論と実践

ジャック＝ダルクローズ音楽院 Collège (最高協議会)



ダルクローズ・アイデンティティー

専門課程に於けるジャック＝ダルクローズリトミックの理論と実践

ジャック＝ダルクローズ音楽院 Collège (最高協議会)

第一節：序文

ダルクローズ ID (アイデンティティー) 第1版「ダルクローズリトミックの理論と実践」は、21世紀初頭に ICCEPT (国際リトミック専門家養成組織委員会) が行った調査を受け、2011年に発刊された。この国際的な調査で明らかになったのは、世界にはダルクローズの名前を記載した実に様々な授業や講座があることであった。しかしその一方で、ダルクローズの名前を記載しない授業や講座(多くの場合リトミック教育と謳っている)も存在するが、根本的にはダルクローズである。そこで第1版では次の質問から始まった。

『ダルクローズトレーニング』と呼ばれる授業や講座にはどのような特徴があるのだろうか。

このダルクローズの理解を深め、認識させ、普及、発展させるために、ダルクローズの名前を正当に使用するための最小限の必要条件を明確にすることが重要である。この資料はダルクローズ専門教育の特徴と目的、トレーニングコースに要求される必須内容、学習方法と指導方法、教育原理と実践法、開発される能力とその評価法が示されている。

この活動はジャック＝ダルクローズ音楽院 Collège (最高協議会) の主導により行われた。Collège は、メソッドを保護し促進させる目的で設立された。ダルクローズが確立したメソッドの基盤を存続させ、発展させるという方針を明確にするために、ダルクローズ自身によって設立されたものである。以来 Collège はジュネーヴ・ジャック＝ダルクローズ学院財団へ助言をする顧問団である。ヨーロッパ諸国や様々な大陸にディプロマ保持者が増加し、代表者が Collège に参加している。彼らはアドバイザーとして、ダルクローズの資格、取得試験に関する規定について、国際的見地から顧問団を援助している。国際的な領域に関する知識と推奨事項を作成することで、Collège は、財団がダルクローズ資格取得、Jaques-Dalcroze という名前を使用する権利、資格を有するすべての指導者の管理を助けている。これを念頭に置いて、ダルクローズという名称を合法的に主張できる教育原理、実践、および内容を明示した文書を作成することは重要であると考えられる。この目的のために、Collège はそのメンバーから資料作成委員会を任命し、「ダルクローズ・アイデンティティー：ダルクローズリトミックの理論と実践」というタイトルの資料を作成した。この資料は、2009年2月26日の Collège 会議によって承認された。主に財団と世界中のダルクローズトレーニングの責任者を対象として、この資料は全てのディプロマ保持者に送られた。

その後、資料は2015年7月にジュネーヴにあるジャック＝ダルクローズ学院（IJD）で開催された国際大会で協議された。第2版はこの結果を反映したものである。

第2版のタイトルは、特にダルクローズリトミックの専門的なトレーニングに於ける内容を強調している。他の種類のトレーニングやコースに対して参考となる内容を含むが、それらの分野の開発を目的としたものではない。文章の変更、特に脚注の追加は、読者を支援することが目的である。

Collège（付録A、Collège 憲章 p. 24 を参照）および全てのディプロマ保持者は、口頭で伝えられた一連の実践的な知識または実践方法、伝統的な本質を広める責任を持つ。このメソッドの実践は、創設者に触発され、互いに影響しあう多くの人々によって開発された。これが、メソッドの根幹であり、豊かさである。

さらに、継承された伝統（メソッド）は発展し、時と場所に適応されていくべきである。Collège とディプロマ保持者は、ダルクローズ財団およびダルクローズ学院の理事と協力して、メソッドの発展と適応を推進および監督すると同時に、それらがダルクローズの教育原理に適応していることを保障する。（É. Jaques=Dalcroze の意志と名前の使用条件 付録 B p. 26 を参照）

第二節：前文

ダルクローズ教育の特徴

ダルクローズ教育の特徴を確立するために、先駆者達の間でさえも多様な実践があったことに注目することは重要である。彼らはセラピー、ダンス、音楽教育、舞台芸術、一般教育など、自分たちの興味のある分野にダルクローズ教育を取り入れ、彼ら自身の気質、才能、個性に応じて個々に適用させていった。また同時に、彼らが長い間実践を深めていく間に共通するものも見られた。このような多様性は創始者によって奨励されており、メソッドに本来備わっている多目的性と豊かさによるものである。しかし、そこには問題や疑問もある。つまり『ダルクローズ教育』であると判断できないほどに変化させ、メソッドを崩してしまう恐れがある。

20世紀初頭からメソッドは世界的に普及していったが、世界中の多くのダルクローズ指導者達は、距離の隔たり、人の移動、戦争によって隔離化していき、その結果、メソッドは個々に発展していった。最近の実践法にはダルクローズの名前を用いたものが多いが、いくつかは関連性が見えないものもある。学院創立から約100年経った今、散乱してしまったそれらを集め、この実践法を明確化し、共通の活動を目指して一体化する時期なのである。

現代のコミュニケーション方法は距離と孤立を取り払った。地球上の様々な地域からの同僚と指導法の共有、レッスンの見学や、オンラインレッスンへの参加等の交流、協議を可能にする現代テクノロジー

ーに感謝したい。然しながら、様々な情報や知識を拡散する可能性を与えてくれるこれらのメディアは素晴らしいが、ダルクローズの専門的教育を深く理解し、その特徴を明解に伝えることには貢献しない。

ダルクローズは自身のメソッドを「芸術への準備」と位置付けた。彼はメソッドを標準化することや、方向性を定める規則を書き記すことをしなかった（事実、全ての標準化された企てや規則はダルクローズによるものではない）。ダルクローズメソッドでは、道具の使い方、目標に向かっての練習方法は、メソッドの教育原理を基盤とするべきである。ダルクローズは能力の高い著述家であった。彼は個々の指導者に教育原理に則った自身の指導方法を要求した。他者の方法を使ってダルクローズのリトミックを教えることはできない。これは、今実践されている殆どの他のメソッドと区別される要因の一つである。アドルフ・アッピアが観察したように、それは音楽教育を超えて人々の生活を変える力を与えるものでもある。

第三節：教育課程

この節では、ダルクローズ教育課程に最小限含めなければならない内容について述べる。

全てのジャック＝ダルクローズ専門課程の受講生は、より多くのダルクローズ指導者から教えるを受けるべきであるという Collège の考えのもと、その課程は、次のように構成されている。

リトミック (R)	}	メソッドの3つの主要分野
ソルフェージュ (S)		
即興 (I)		
プラスチックアニメ (Pa)		
理論と原理 (歴史的側面や現在の状況、成果も含む)		
指導法		
実習		
論文、レポート		

3つの主要分野が互いに強い関連性を持ちながら、次の3項目が行われるべきである。

プラスチックアニメ
理論と原理
教育、セラピー、芸術への応用

教育目的

- ・ジャック＝ダルクロワズリトミック教育に必要な姿勢、能力、テクニックや知識の育成
- ・ダルクロワズの原理に従い、音楽的想像力や音楽の諸要素を、全身を使った動きや声、楽器演奏を通じた体験を積む、洗練された表現力の育成
- ・社会人として、芸術家としての総合的発達育成
- ・行動や言葉による伝達能力、音楽指導能力、口頭、及び文書でジャック＝ダルクロワズメソッドの理論と原理を述べることができる能力の育成

教育課程の特徴

3つの主要分野とプラスチックアニメ（RSIPa）は、音楽と動きがメソッドの中心であり、必然的にそれらの分野間のつながりや相互関係が明確である。

思想と原理

ダルクロワズ教育課程の特徴は、以下のような思想と結びついている。

- ・身体は、体験をする場であり、個人の芸術的な表現をする場である。
- ・個人の発達は身体と思考と感覚（感情）による体験によるものである。
- ・人は社会の中で、常に他者と関わりながら生きている。
- ・感情や振る舞い、思考からの率直な表現行為である音楽のリズムは、全人格教育の様々な側面を支える一番良い方法である。

ダルクロワズ教育の特徴

ダルクロワズ教育の主要な特色は次の通りである。

- ・リズムカルな身体の動きは、意識して能動的に「聴く活動」や内的聴取力の発達を通して得た音楽の様々な要素に基づいている。
- ・神経システム（感覚反応）と身体其自然なリズム（分離、関連性を含む）を同時に育成させる教育である。具体的には自動性（無意識反応）注1と適応能力の発達、空間と時間と全てのエネルギーのニュアンスの多様性、想像力（表現と独創性）と音楽的理解力の育成である。
- ・リトミックは、『神経システムの教育であり、精神力と豊かな想像力を培う教育である』（JAQUES-DALCROZE Emile,1932 in JAQUES-DALCROZE 1965 p.16）
- ・リトミックは『神経反応を秩序だて、筋肉と神経を一致させ、精神と身体との調和を目指す特殊な教育である。』（JAQUES-DALCROZE Emile, 1919 in JAQUES-DALCROZE 1965 p.6）
- ・3つの主要分野（RSI）はそれぞれが密接な関係を持っており、各分野が他の分野の手段を取り入れることで、その分野の持つ特徴を明解にする。

教育課程の全ての要素は、実践と理論、音楽と動き、個人活動とグループ活動においてバランスよく行われることが必要である。学習者は、彼らが行っていること、なぜそれを行うのかを意識化する力を

習得するべきである。彼らは様々な経験や経験の特性の違いを識別すること、話し合うこと、そこから理論を引き出すことを学ぶ。ダルクロゼ教育には、特徴的な学習方法と指導方法がある。どちらも各分野の中でそれまで学んできたことを融合させながら、意識力や理解力を高めることでダルクロゼの理論と原理を結び付けていく。そのため、自分自身の学習として、また指導法としてのトレーニングが1つの授業内で行われるダルクロゼの教育は、それぞれのトレーニングを明確に結びつけて行うことが重要視されるのである。

注1：自動性（無意識反応）とは、あまり意識せずに行動や反応ができることである。自動性は反復練習により獲得される。この能力は精神の緊張を解き、実行すべき行動、反応を容易にする。例えば、車の運転はその良い例である。車の操作は日々の反復により技術として獲得され、故に運転者は道路状態や信号に意識を向けられるのである。また、ピアノをはじめとする楽器演奏テクニックも、反復練習によって指は無意識下でも適切に動く。従って演奏者は音楽表現に意識を向けられるのである。

<学習者として>

学習方法は、身体、感情、社会性、知性を同時に喚起させる本質的で総合的な方法で構成されている。人は感じ、反応し、理解し、関連付けることができ、表現し、考え、分析し、創造し、伝えることができるからである。

身体は楽器である → 学習者は自分という楽器から学ぶのである

『体験しながら学ぶ』注2

学習者は、様々な活動、意識して「聴く」ことを通して、「動きと思考間の素早く軽快な伝達システム」（JAQUES-DALCROZE Emile, 1945年、1909年）を発達させ、容易に、そしてお互いに誘導し追従する適応能力、柔軟性を発達させる。常に適切な反応を心がけながら、様々なリズム、音、動きの要素や様々なレベルの強さや速さに対する動きを繰り返し練習することで、それらが無意識に行う能力を身に付け、すべての面において、容易に行える力を発達させることが出来る。

学習者は、能動的で感覚を目覚めさせる活動により、フィードバックを通しながら、様々な情報の分析、つながり、発想力を培うということを学ぶ。彼ら自身の学習方法やその方法を発達させることを学ぶのである。

注2：哲学者 John Dewey による

<指導者として>

ダルクロゼの指導では学習者が中心となる。指導者は、学習者自身が問題に気づき、その解決ができるように導き、手助けするようにする。それまでの体験に新しい体験を加え、学習者の内側にあるものと現実を結ぶ懸け橋をつくり、また他者との協調性を育てる。

音楽自体を通しての指導（ダルクローズは、音楽は言葉や映像よりも直接的に人間に物事を伝えると考えている）が、身体、感情、社会性、そして人の知的側面にも影響する根本的で総合的な学習方法であり、指導者は学習者を育てるために、失敗を恐れず、個人でもグループの一員としても能力を発揮できる環境を提供することが大切である。

指導者の即興演奏はレッスンを導くための主要な手段である。指導者は、学習者の神経システムや運動能力を柔軟にし、強化する指導テクニックとして即興演奏を用いる。即時反応のエクササイズでは、予期しない命令により、行動の中断、変更をしなければならない。それらは、テンポの変化、拍子、フレーズ、リズムパターン、テーマの記憶、補足リズム、トランスフォーメーションなど様々な場面で応用される。このように臨機応変に行う即興演奏は、教育の効用から考えても、口頭での解説や実例を上回る効果をもっている。

ダルクローズ指導者は、本質的に容易に様々なスタイルで指導できる多機能者である。ある時は学習者の必要に応じて適応し、またある時はリーダーとして指導し、トレーニングし、修正する。指導者は、目に見えない音楽の語りかけで、学習者達にリズム、拍子の突然の変化、合図等の刺激を与え、学習者が聴くことを余儀なくさせられる状況を作り、様々な方法で反応できるようにする

指導者は学習者達にエクササイズを通して何を学んだかを伝え、意欲を起こさせ、激励することで、彼ら自身の創造力や考える能力をかき立てるようにする。

典型的なダルクローズのエクササイズを行う場合も、単なる練習の模倣ではなく、その練習の意義や精神を考えるべきである。ひらめき（インスピレーション）の感覚を維持し、古典的な練習を行うことは、指導者独自の練習を創作する源になる。

第四節：授業内容

1. リトミック

リトミックは、ダルクローズ教育の核となるものであり、その原則や指導技術は、リトミックだけでなく、ソルフェージュや即興、プラスチックアニメにも適応され、ダルクローズの特質が活かされることになる。

① 目的

- ・音楽によって最も重要な楽器（身体や様々な知覚）を磨くことである。音楽を通した自分自身の教育であり、音楽を学ぶための教育である。『身体を芸術に捧げる前に、身体構造を完全にし、すべての機能を発達させ、すべての欠点を直すことが望ましい』（JAQUES-DALCROZE Emile,1916, in E.Jaques-Dalceoze,1965. P106)
- ・様々な状況に対する適応力を高め、ある動作から次の動作まで、ある状態から別の状態までの移り変わりを素早く、しなやかに行なえる力を高める。

- ・全身体を使った動きを通し音楽的想像力や経験の幅を広げ、音楽の要素や一般的な芸術を体験、表現する能力に磨きをかけ高める。
- ・全ての感覚、特に聴覚、視覚、触覚、運動感覚（または、ダルクロゼの表現による6番目の筋肉感覚）を用い、リズムに内在する感覚、想像力（imagination）を高める。
- ・学習者が人としても、また芸術家としても他者とのコミュニケーションや対応のできる演奏家、創造的芸術家になるように育成する。
- ・音楽性や音楽能力を高める。

② 開発される能力

- ・音楽、動きの相互関係に関する感覚、分析力、理解力、また、動きの活動においてそれらを発揮する能力
- ・言葉、音楽、視覚的また運動感覚の刺激に対して適切な反応をする能力。また必要に応じて、反応（リアクション）を変えることができる能力
- ・色々なアイデアで、創造的に演奏する能力

③ 習得過程

- ・運動感覚を含む様々な感覚を通して、音楽的な意識を促進するための、音楽と動きの組み合わせのエクササイズ
- ・運動神経の発達や神経組織の覚醒の為のエクササイズ（レッスンの始めにウォーミングアップとして行われることが多い）
- ・社会性、集団と個人のかかわりの意識を高めるためのエクササイズ
- ・順応性や反応力を高めるための即時反応エクササイズ
- ・記憶や動きの自動性育成のエクササイズ

『このようなエクササイズが目標としているのは、精神集中力の強化、効率の良い身体機能の強化、個性の開花である。加えて、神経組織の段階的な教育を通して、感受性の乏しい人々の感受性を発達させたり、場合によっては、かなり緊張したり過度に興奮したりする人々の神経反応を調整することも目的としている。』（JAQUES-DALCROZE Emile,1910 p.22）

④ 内容

リトミックの講座（授業）を通して行うエクササイズには、複数の価値が存在する。音楽と動き、社会と個人の間の実際、そして潜在的関係を知るための様々な技法を用いたエクササイズがある。エクササイズやレッスンの中で様々な練習を組み合わせることにより、同時に発達を促進し合う。学ぶべき具体的課題については第五節に明記する。それらはリトミックのエクササイズの目的になるだけでなく、ダルクロゼの他の分野においても体験することになる。

*時間 / 空間 / エネルギー

音楽と動きが持つ、時間、空間、エネルギーの関係はメソッドの根幹である。

- ・時間：長さ、規則的刻み、リズムモチーフ、小節、フレーズ、ライン、輪郭、タイミング、テンポ、形式、構成
- ・空間：方向、平面、高さ、ライン、軸、大きさ、パーソナルスペース、共有空間、間隔、輪郭
- ・エネルギー：緊張、強さ、速度、ペース、ニュアンス（ダイナミクス、アゴーギグ）、アーティキュレーション、作動力、重力と重量

演奏や芸術作品の構成、内容は、これら三つの要素（時間・空間・エネルギー）の関わりによって成り立っている。

*ダルクローズリトミックにおける動きの特徴

- ・空間、距離、重量、速度の概念は身体全体の動きを通して（その場で、または移動中に）探求される。ステップ、クラップ、タップ、スウィング、腕の動きなどは、すべての感覚に基づいて（または連携しあって）行われており、それは、演奏や音楽的リズムの正確さに必要である。
- ・リトミックは集中的な聴覚訓練であり、内的聴取と意識して聴く能力の発達を促し、聴覚と脳を連携させ、学習者たちが音楽を具体化し、深く習得することへと導く。
- ・動きは、拍や拍子だけでなく、ニュアンス、フレーズ、形式、時間、空間、エネルギーの関係など、あらゆる種類の音楽表現を学習者たちが経験し表現する主要な手段なのである。
- ・動きを伴うリトミックは、固有受容感覚^{注3}、バランス、即時反応の訓練を通して神経組織や感覚器官（視覚・聴覚・触覚・運動感覚^{注4}）の訓練を含む。
- ・道具（ボール、フープ、スティック、ロープ、タンバリン等）を扱う技術は、多くのエクササイズに役に立つ。
- ・動きのエクササイズには、音楽と関連した空間の使い方と重さへの意識を高めることを目的とした技術的で創造的なエクササイズを含んでいる。
- ・継続した動きのエクササイズの研究。フレーズやアッチェレランド、ラレンランド、クレッシェンド、ディミニユエンドの表現に必要な継続した動き、連続した動きへの取り組み。
- ・リトミックの動きには、速度に応じた大きさの指揮（腕全体、前腕、手首）を用いて、メトリック的分析をすることも含まれる。

注3：体の各部位の存在を、そこを見ることなく認識できる感覚

注4：運動感覚は、関節の動きや筋肉の緊張等が、我々に自身の動きの状態（情報）を伝えてくれる。（R. Schmidt, *Apprentissage moteur et performance*, Vigot:1993）

今日のリトミックは、以下のような特徴的な要素を含んでいる。

- ・バランス（直線、中心軸、床とのコンタクト）
- ・動きの開始点と終止点
- ・360度の空間（角度、軸、面、高さ）
- ・空間と重心の使い方
- ・様々なタイプの移動を伴う動きにおける速度の関係
- ・動きの調和、結合、分離
- ・動きのつながりと明瞭なアーティキュレーション
- ・継続した動き
- ・動きの弾力性、勢い、弾み
- ・躍動的な動き
- ・動作の正確さ（特に指揮、クラップやフレージング）
- ・様々な種類のジャンプ、スイング、ステップの幅などを用いた、ダイナミクス、アゴーギク、タッチなどのニュアンスの上達。

⑤ まとめ

- ・リトミシヤンは音楽と動きを結びつける専門家である。ダルクローズメソッドにおいて、動きは聴覚のトレーニングであり、意識的に聴くように考えられており、動きを通して音楽を経験することで音楽の理解に結びつく。
- ・リトミックは内的聴取と感性を発達させる。この2つを合わせることで、音楽的な展開を予測することができるようになり、自身の意志を明解に構築し、また聞き手や他の演奏者への意識を持った演奏（動き、歌、楽器演奏）が可能になる。動きは耳と脳を結びつけるものであり、音楽への具体的、かつ深い理解へと導く。
- ・音楽は、様々なエクササイズを通して動きに刺激を与え、同時に学習者の精神運動（psychomotor）訓練の主要な要素でもある。運動器官と感覚器官が知性と感情に結びつける、身体全てが芸術的な楽器になる基礎を作る。

このため、ジャック=ダルクローズは、『リトミックは芸術ではなく、芸術のための準備である』（JAQUES-DALCROZE Emile 1924 p.2）、『音楽による、音楽のための教育である』（JAQUES-DALCROZE Emile 1926 p.3）と述べるに至った。

2. ソルフエージュ^{注5}

『ソルフエージュの学習は、音高や音と音の関係、その質感の違いを感じる感覚を目覚めさせる。この学習では、全調によるメロディーと対位法、様々な和声の組み合わせを聴く。そして内的に再現、読譜、声による即興、記譜、作曲ができるようにする』（JAQUES-DALCROZE Emile,1914,in E. Jaques-Dalcroze, 1965 p.61）

注5: 「ソルフェージュ」と言う言葉は、多くの場合視唱や音の名前で歌うことを意味する。固定ド唱法（フランス語圏でよく使われる）を取り入れている国々では「ソルフェージュ Solfège」と呼び、移動ド唱法（Glover, Curwen, Kodaly）を取り入れている国々では「ソルファ Solfa」と呼ぶ。イギリスに於いての Aural training（聴覚トレーニング）は、単に視唱のみを意味するのではなく、和声感覚、記譜、を含む。アメリカ、カナダ、オーストラリアでは、ear training と呼ばれている。ダルクローズメソッドでは主要3科目の1つとして「ソルフェージュ Solfège」と呼び、聴く、歌う、読む、書く、理論の理解など多岐の領域を含み、身体反応、即興的活動を伴い、学習者の能力向上を図る。

① 目的

- ・音楽的な技量と音楽への気づきの発達
- ・聴力、内的聴取、音と音との関係の認識、音の構造の理解力の向上
- ・ダルクローズの原理に基づく動き、歌唱を通じた作品への精通、音楽的教養の向上

② 開発される能力

*声:

- ・年齢に応じた発声の基礎
- ・正しいピッチでの歌唱
- ・ブレスやフレージング習熟
- ・声域の拡大

*聴力と声調:

- ・音名や音の機能を識別し、歌う
- ・アクセント、ニュアンス、フレーズ、休符の学習
- ・音程や和音の認識と声による構築
- ・声域外の音を認識し、自分の声域に還元して歌う
- ・読譜（視唱）
- ・移調、転調、終止形
- ・和音、多声音楽、和声
- ・身体で別のリズムを表現しながら（動き、ボディーパーカッション、クラップ、ステップ、または楽器）メロディーを歌う（オスティナート）
- ・色々なリズムやメロディーモチーフを用いた、声による即興および作曲

*その他

- ・様々なスタイルの歌を学ぶ

- ・合唱、デュオ、ソロ
- ・メロディーに歌詞をつける
- ・音楽の解釈と指揮

③ 学習過程

- ・音、ハーモニー、リズム等に対する内的聴取のエクササイズ
- ・音への意識を高める手助けとなる動きや空間の使用
- ・内的聴取、正しいテンポ、形式で音楽を構成する能力を高めるための即興の使用

④ 内容

- ・音階、旋法、音程、メロディー、和音、転調、対位法等の歌、声や即興唱による理論と実践
- ・絶対音感と相対音感、繊細で正確な音の聴き取りと音程、精神及び音楽的な覚醒、集中力と記憶力を高める練習
- ・呼吸や身体のバランス（姿勢）、筋肉の弛緩、視覚的反応力（読譜等）
- ・カノンや無調、セリエル音楽を含むすべての時代の多様な歌曲を用いた練習

*ダルクローズソルフェージュの特徴

リトミックの原理と技術は、ソルフェージュの学習、指導（聴取、発音、読譜、記譜）にも応用される。

『まずは、生徒の内的聴取やリズムの理解を高めた上で、（教師は）リズムの抑揚の内的聴取、認識、創作する能力を強化することを試みる。』（JAQUES-DALCROZE Emile1914,ibid. p.67）

ダルクローズソルフェージュが従来のソルフェージュ教育と著しく異なる点は、このトレーニングに動きと即興的活動が組み込まれたことにある。例えば、音や音符の学びは、動きと創造性に関連付けられている。この指導法は、従来のソルフェージュ教育（固定ド、移動ド、音名、番号唱、階名）にも応用できる。

⑤ まとめ

リトミックの全ての教育原理と技術は、視唱や聴覚訓練の学習に適用される。移動ド、固定ドの両システムが使用される。リトミックで学ぶリズムパターンや拍子の要素はソルフェージュの授業に組み入れられる。

即興はソルフェージュの授業でも手段のひとつとして用いられる。ダルクローズのソルフェージュは相互作用的なプロセス、動き、即興を用いて音程、リズム、読み書きの正確さだけでなく、音楽的な創作力、表現力、コミュニケーション力を発達させる。ソルフェージュの授業には、多声部の歌唱、指揮、作曲、演奏が含まれ、完成された音楽家の育成を目指している。

3. 即興（声や楽器）

① 目的

- ・音楽を作り、音と動きの関係を示すために、豊かな想像性、自発的、個性的な表現力、それらを組み合わせながら、音素材や動きを巧みに使うこと
- ・様々なスタイルで即興できること
- ・動きを引き出す即興、または観察した動きに応じて即興できること
- ・メロディーテーマやリズムの反復を記憶する能力を向上させること
- ・即興で他者（演奏者、ダンサー、話し手）と対話できること
- ・グループで即興すること

② 開発される能力

- ・動きを正確に音に置き換え、あらゆる動きに対して音楽をつける力。動きをサポート、助長し音楽の意図を伝える力
- ・即時反応やリトミックの課題のための即興力
- ・音程、音階に基づき与えられたスタイルのモチーフ、リズム、拍子、和音の即興が出来る力（動き手と共に、動き手の為に）
- ・ボディーパーカッション、楽器（伝統的な楽器含む）、物語や詩、映画や動き、擬音（オノマトペ）や音真似、等を用いながら即興する力
- ・テーマやリズムの反復の練習を使用し、楽器を用いた即興に於ける聴取力、記憶力
- ・模倣を使用し様々な様式へ発展させる力
- ・場面や雰囲気を作成する力
- ・パートナーと、またはグループの一員としての即興力

③ 学習過程

学習者は、音楽の構成とスタイルを作り出す手法、雰囲気や感情を喚起するための手法を次第に身に付けて行く。自然な動きや訓練によって得られる動き、ダンスや身振りと言の相互関係を学ぶ。学習者達はグループで行うことにより、互いにフィードバックをしながら学ぶ。

④ 内容

ピッチ：

- ・楽器による音の高さ、音程、和声を聴き分ける
- ・特定の音列や音程を使う（例：3, 4, 5, 6音や音程）
- ・無調、旋法、全音音階、半音階を使った即興
- ・近代旋法（全音音階、メシアンモード）の使用
- ・あらゆる時代の作曲家が用いた和音

リズム：

- ・様々な拍子（アナクルーシスから始まるものも含む）の即興
- ・リズムオスティナート、メロディーオスティナートを用いた即興
- ・リズムパターンを用いた即興
- ・拍節を感じないリズムや追加リズムでの即興
- ・変拍子や不等拍による即興

ニュアンス：

- ・タッチ、アーティキュレーション、ピアノにおけるペダルの使い方
- ・強弱（クレッシェンド、デクレッシェンド含）のニュアンス
- ・アツチェレランド、ラレンタンド、ルバート等の速度のニュアンス
- ・速度やダイナミクスの突然の変化

形式：

- ・テーマの創作：メロディー、リズム、動き
- ・フレージングやフレーズの発展
- ・民族音楽、伝統音楽に基づく形式（ABA、AABA、ロンド、変奏曲 etc）の学習や創作
- ・提示された和音進行による即興
- ・歌や曲の伴奏や編曲、及びそれを用いたエクササイズの作成。既成の曲を用いた即興練習

応用：

- ・音色、雰囲気を作り出しながら音楽を組み立てる
- ・動きのための即興：自然な動き、道具を用いた／用いない一連の動き、ダンス等
- ・リトミックのエクササイズのための即興：即時反応、フォロー、カノンなど
- ・音楽に言葉を付ける：歌の作曲
- ・ソルフェージュのための音階やメロディーへの和声付け
- ・即興を通して学び得た様々な要素を用いた作曲

***即興におけるダルクローズ教育の特徴**

声や楽器または動きによる即興は、リトミックやソルフェージュにおいて、指導者、学習者が共に用いるが、指導者にとっての即興はリトミックの主要な手段である。音楽の即興は、特に以下のために用いられる。

- ・学習者の動きを導き出し、喚起させる
- ・模倣、または練習のためのリズムパターンの提示
- ・学習者自身の動きの表現力を高める
- ・記憶、または分析するテーマの提示
- ・いろいろな音楽的な働きかけに対して、生徒が容易に反応できるように導くこと

即興指導は1つのスタイルに限定されない。即興演奏者は動きに対して効果的に演奏でき、変化していく状況に応じ、瞬時に音楽を合わせられることが最も大切である。トレーニングを受けたダルクローズ教師は即興に音楽の合図 — 音楽による HOP — を即興に組み入れられる。それは即時反応のエクササイズで、学習者の神経組織や順応性を刺激し調整させるのが目的である。即興の指導は、ソロやアンサンブルの活動が出来るように、通常小グループで行なわれる。

指導者の仕事は、学習者がリトミックを通して身体全体で得た技術や原則を、ピアノ演奏に於いて最大限に活用できるようにすることである。

⑤ まとめ

ダルクローズ指導者にとって、即興は最も重要な能力や手段のひとつであり、同時に学習方法でもある。リトミックのレッスンでの反応（動き）を鼓舞し、助長させるために即興が使われることは、他にはない特徴である。指導者には即興を通して自身の音楽や練習を創作し、音楽の内容や演奏方法によりクラスを様々な方向に導いていく能力が必要である。クラスも指導者の即興に対して即時的に反応していく中で反応力、注意力、適応力を学ぶ。優秀なダルクローズ指導者の手による即興は、指導者と学習者との主な対話の手段となる。

ダルクローズメソッドの即興は単なる自己表現や即興の為の即興ではない（この両方を授業で含むことはある）。学習者が技術、表現力、コミュニケーション能力のある音楽家として応じられるよう、聴覚的、身体的なトレーニングを行う。

即興演奏者は、色、音、動き、感情の世界を即座に引き出せるように、様々なスタイルで即興できる必要がある。その為に指導者はダルクローズの指導テクニックを用いる。

4. プラスティックアニメ

① 目的

- ・リトミック、ソルフェージュ、即興、また和声やボディーテクニックなどで学んだことを用い、創造的で音楽的解釈を伴った動きによる音楽作品を視覚化する
- ・音楽の流れ、時間—空間—エネルギーと重さの関係、フレーズの終止に向かう行程、感情や情景を表現する
- ・異なったパートや声部が、どのような関連を持ちながら動いているかを表現する
- ・フレーズ、形式、ダイナミクス、構成、特徴そして、表面的なもの、内面的なものを表現する
- ・音楽の解釈、意図を他者に向け視覚化すること
- ・プラスティックアニメで理解したことを他の芸術に応用し、プラスティックアニメにフィードバックすること

② 開発される能力

- ・プラスチックアニメの創作に於ける他者との協働力
- ・聴取力と同様に、楽譜を通しての様々な音楽作品の分析力
- ・楽曲の表現に於ける音楽と動きの関係の理解力と表現力
- ・音楽の全てのパートを視覚化し、理解するための空間構成力
- ・構成、音の厚み、テーマの発展を身体の動きによって伝える力
- ・ポリフォニーの声部間の関係、もしくは他の様式による作品のパート間における関係を動きで表現する力
- ・作品の色合いや雰囲気を動きによって表現する力
- ・動きとしては表出していない、楽曲の内面を表現する力
- ・解釈が幾つかありえる不確実な部分を表現する力
- ・制作過程の意味や趣旨を明らかにすること、または考案する力
- ・必要に応じて、意味や趣旨を強めるために、適切に照明、衣装、小道具、その他の用具を活用する力
- ・音楽を動きで表現する力
- ・自分自身で演じる力
- ・音楽作品を他の芸術作品と対話させる力

③ 学習過程

学習者は音楽作品を理解するためにその作品を動きによって視覚化するトレーニングを受ける。学習者自身が「この音楽はどのように動いているのか」「作曲家の意図は何か」「どのように感じるのだろうか」「動きでどのように伝えることが出来るだろうか」と自分自身と対話しながら、作品をリズムや形式の分析だけではなく、ダイナミクスや構成、その構成部分の関係、作品の意図としているものも分析し再構築する。楽譜、音、動き、その他の要素を用いてグループで意見交換しながらオリジナル作品が作られる。これはプラスチックアニメのトレーニングの一部でもあり、それ自体が芸術活動である。

④ 内容

- ・音楽的な感性や意図を伝えるための空間、方角、方向、重心の使い方のエクササイズ
- ・動きや身振りを通して、調性もしくは無調性の関係を表現
- ・楽曲の異なった様式、形式や構成の学習
 - ABA、カノン、ロンド、フーガ、テーマの変容、セリエルミュージック、アーチ形式(ABCBA)、ミニマリズム等
- ・異なったグループ編成での学習：ソロ、デュオや対話、カルテットと室内楽、交響曲、合唱 等
- ・動き、詩、思想、絵画、建築作品等を基にした音楽表現の創作
- ・テーマとバリエーションの学習

- ・音楽的な表現（プラスチック）に焦点をあてた様々な楽曲の学習
- ・動きだけで全てを表現する音のない作品の創作
- ・音楽、動き、言葉間の対話
- ・「あなた自身が音楽である」、表現者による音と動きの創作
- ・補助的に視覚的なアイデア（プロジェクター、舞台装置、小道具）を活用する力

*特徴

基本的に、プラスチックアニメ（動いている造形技術）は、個人またはグループによって、「音楽を視覚化する」ことである。次の段階として、プラスチックアニメは音楽との対話となる。言葉、照明、他の要素も取りいれたり、終始無音で表現したりすることもある。

音楽作品の表現としてのプラスチックアニメは、音楽作品の新たな発見をする道程である。体験を通したリアルタイムでの分析であり、このメソッドを学ぶ学習者が主要3分野に於いて学んだことを、分析的にまた創造的注6に応用する能力を示す場でもある。

注6：ダルクローズは「本当に才能を持った指導者のみがこの活動を一つの芸術活動として公の場で発表できる」と言っているが、プラスチックアニメはすべてのリトミック学習者が体験すべき芸術的経験であることを再確認することは重要である。1919年にダルクローズは「プラスチックは表現者の直接的経験によるものである。然しながら観衆の目に直接働きかける完全な芸術でもある」と書いている（Jaques-Dalcoze, 1921/1967,p.147）。とは言え、レッスンにおいても、楽曲を身体的に解釈することは、フレーズ、ダイナミクス、形式、曲想等、非常に繊細な経験を意味し与えてくれる。これらの学習は、指導者が、恵まれた才能、質の高い想像力、構築力が上演するに値すると感じた時に発表されるべきである（Jaques-Dalcroze,1924, p.3, trans, K. Greenhead）。

⑤ まとめ

「ダルクローズの課題（サブジェクト）」の学習が、教授法や学習法の総括であるように、プラスチックアニメは楽曲分析に応用され、創造的解釈が学習の核となる。プラスチックアニメは通常はグループで行われるが、音楽によってはソロで行うことも全く可能である。初級レベルでは、与えられた曲を解釈し表現するようにする。この技術を習得するトレーニングの一部として、学習者は即興、擬音の使用、無音の中での動き、他の芸術からの学び、内的聴取や感性を高める努力をすることが大切である。こうした技術は独自の芸術作品の創作に用いることができる。

第五節：ダルクローズ教育の理論と実践

理論と原理

指導者養成課程には次のことを含まなければならない

- ・ダルクローズメソッドとその原理
- ・メソッドを通しての学習や指導における歴史的背景と現代の理論を反映したディスカッション

- ・ダルクローズリトミックに於ける研究の学習
- ・関連文献講読
- ・ダルクローズの課題の学習
- ・メソッドの全ての分野の関連性とその確立

ダルクローズメソッドの課題

ダルクローズの課題は、経験や表現の本質的な要素であり、それらを学習し分析する枠組みを示してくれる。ダルクローズ教育の中心となっている課題は、特にダルクローズの学習、指導の核となるものであり、様々な芸術や教育に於いても理想的である。

原則として課題の数に上限はない。というのは、新たな要素を発見したり定義したり、異なる分類方法を用いたりすることは常に可能だからである。各指導者は自分たちの目的に最も分かりやすく、理解しやすく、有用であると思える分類法を自由に選んでよい。どのような場合でも学習者がそれを深く探究する機会を与えられることが重要である。課題の分類の研究は、個人的な考察（講読、楽曲、芸術全般、日々の経験）による場合もある。課題はダルクローズの授業や教育実習において、クラスメイトや生徒たちに与えるテーマとして用いることもある。

3つのリストがある。リストAは音楽と動きに関する項目、リストBは学習と指導の過程、方法、リストCは訓練され開発される能力である。

ダルクローズの課題

リストAー音楽／動き

- ・パルスとテンポ
- ・拍と小節
- ・拍子：変拍子、不等拍、メトリックトランスフォーメーション、複拍子、拍のまとまり（12個の8分音符）
- ・長さ
- ・リズムパターン
- ・リズムフレーズ
- ・複リズム（クロスリズムも含む。2：3、3：2、4：3、3：4、5：3等）
- ・追加リズム注7
- ・補足リズム
- ・タイミング
- ・アナクルーシス・クルーシス・メタクルーシス（アナクルーズ・クルーズ・メタクルーズ）
- ・フレーズとフレージング
- ・ニュアンス（強さ、速さ、触感、厚み、密度、高さ、アーティキュレーション）
- ・繰り返しと対比

- ・間、休符、無音
- ・アクセント、変化、強調（メトリック、リズム、情緒的、和声、メロディー等）
- ・クロスリズム
- ・シンコペーション
- ・メロディー、ポリフォニー、ハーモニー
- ・カノン
- ・拡大、縮小（2倍、3倍速く／遅く）
- ・拍や空間の分割
- ・形式、楽節、音型、音楽の構造
- ・空間の使い方
- ・時間—空間—エネルギー

注7：追加リズム：伝統的なバイナリー、ターナリーのリズム体系に捉われず、一定の分割を基本に自由にそのグループを作り、それらを組み合わせることによりできるリズム。従って一定の拍は存在しない。（メシアン音楽に代表される）

リスト B — 学習や指導の過程、方法

- ・聴覚、視覚、また触覚による反応、それらを身体によって具現化する
- ・誘発と抑制^{注8}
- ・調整：結合／分離
- ・内面化
- ・自動化と反復
- ・体系化と記憶
- ・個人、二人、グループでの活動（フォロー、リード、アンサンブル）
- ・模倣、即興、動きの創作と指揮

注8：誘発とは反応を直接起こそうとする身体的、精神的な反応であり、抑制とはある現象を抑止する身体的、精神的な反応である。ダルクローズリトミックではこの誘発と抑制の練習は頻繁に行われる。例えば、生徒が身体的に音楽や様々な合図に反応しなければならない練習—移動している、動きによる表現をしている（誘発）、移動や動きの停止（抑制）。これらの練習は神経伝達組織に刺激を与えることにより、神経組織を統制し、筋肉運動のスムーズなコントロールを促す。

リスト C — 実践により開発される能力、資質

- ・注意力と集中力
- ・運動力（左右差、ボディーマッピング、移動）
- ・動きの連携、バランス、重心
- ・身体の自覚、動作の自立
- ・記憶力、内面化（運動のイメージ）

- ・動きと空間移動の調和
- ・方向感覚と空間認識
- ・時間と空間に応じた適切なエネルギーのコントロール
- ・素早い適応力
- ・思考力と決断力
- ・正確で柔軟な再現能力
- ・表現力、想像力、創造力
- ・集団としての意識、社会性、相互の尊重

A, B, C のリストは互いに関連を持ち、共に機能する。例えば、結合／分離のエクササイズには、パルス（刻み）、リズムパターン、ダイナミクス、重心移動、方向転換などが含まれる。また、パルスのエクササイズには、内的にパルスを保持することや外部からの合図に反応する練習などが含まれる。さらに安定したパルス感を完璧にするために、指導者はクロスリズムを用いたエクササイズを行うこともある。

特定のエクササイズはダルクローズ指導法の典型的なものである。中でも「即時反応（ヒップ・ホップ）」は、神経に規則性や刺激を与え、神経反応がより正確で最適になることを目的としたエクササイズである。このエクササイズは、身体のコントロールや自己制御の習得のために助けとなる。自動化の練習と組み合わせることにより、音楽と動きのイメージや相互関係が内的に構築され、学習者の表現とその技術を発展、改善させる。

指導法

未来のダルクローズ指導者は実践的な経験を通して、指導法を学ぶ。次の内容が含まれると理想的である。

- ・授業の観察：様々な指導者による子どもや大人への授業の観察
- ・複数の指導者の中での学習
- ・自立していくために、一人で複数回の授業を実習する

この実習は理論と教育原理に沿ったものでなくてはならない。

リトミック以外の分野、例えばソルフェージュや即興演奏、セラピー、演奏、演劇の分野においてのダルクローズの応用も許される状況下で探求されるべきである。

レポート・論文

この作業は学習者や未来のダルクローズ指導者が、ダルクローズメソッドに対する自分の考えを明らかにし、そして明確に述べられるようになるための手助けとなる。学習者はその中で次のことを実証す

べきである。

- ・メソッドの豊かさや深さの理解（理論的・実践的・個人的）
- ・広域な活動へのメソッドの応用
- ・指導に於ける音楽やエクササイズを創造したり、選択したりする能力
- ・効果的な教案やコース設定を計画する能力

この作業は次のような内容で構成するとよい。

- ・学習者自身のリトミック経験や自分の関心のある分野での考え
- ・指導にも使えるエクササイズ、例曲、様々なスタイルによる楽曲の選集。これらは指導資料として使用できる。
- ・系統立った一連の授業計画
- ・指導を通して、また芸術を超えて、自然分野、人類の経験の中でダルクローズの課題（前述）の研究。
- ・さらに上級過程では、メソッドを多様な分野に多様に展開させる特別な企画（応用や研究）について研究が求められる場合がある。

第六節：評価

評価基準と評価方法は、学習で培われた技量や知識、メソッドに関連した価値に基づいて入念に行われなければならない。継続的な評価は主要3科目全てにまたがり行われる。進級試験や資格取得の為の試験は審査団によって評価される。

技量と知識

評価基準：

- ・内的聴取と感覚
- ・聴覚的に、身体的に予測できる力
- ・筋肉による記憶と神経抑制の発達
- ・動きを想像する力
- ・パルスとテンポの安定性
- ・規則的な強調を感じる感覚とその理解
- ・長さ（パルスあり、なし）の感覚とタイミング
- ・リズムの感覚
- ・フレーズ、フレージングや形式の感覚
- ・触覚とアーティキュレーションの感覚

- ・いろいろな方法による（聴覚的、運動的、視覚的）アナクルーシス、クルーシス、メタクルーシスを感じ取り、表現する力
- ・ダイナミクスの感知と表現
- ・空間の使い方
- ・全身運動に於ける適切な部位の判断とその容易さ
- ・身体の結合と分離、無駄のない動き
- ・生徒と直接対話をする能力
- ・ひとつの課題を様々な方法で指導する能力
- ・バランスの取れた授業計画を立て、学習者の状態に応じて計画を変更できる能力
- ・ダルクローズメソッドの理論や原則を明確に口頭で述べる能力

評価観点：

評価は次のことを考慮に入れる

- ・独創性、創造性、芸術性
- ・順応性、感受性、決断力
- ・観察力、洞察力、判断力
- ・様々な課題や状況と関係を持てる能力
- ・他者への敬意、自制心
- ・直感力と本能
- ・自分自身への自信と挑戦力
- ・学習者が学びやすい環境を作る能力
- ・概念化、意識化、認識力、理解力

第七節：本書の経緯

本書第1版は2006年、ロンドンで開催されたジャック＝ダルクローズ音楽院 Collège（最高協議会）の会議で草案された。

メンバー

Karin Greenhead（イギリス）、委員長及び編集長

Louise Mathieu（カナダ）

Joan Pope（オーストラリア）

*Eメールによる意見提案

Marie-Laure Bachmann（スイス）

Lisa Parker（アメリカ）

2007年 FIER 国際大会期間に行われた拡大委員会で審議される。

*オリジナルメンバーに加わった人々：

Silvia Del Bianco (アルジェンチン/スイス)

Sandra Nash (オーストラリア)

Marie-Laure Bachmann (スイス) がフランス語に翻訳する過程に於いて、上記 Collège メンバーにより改訂され、最終内容として同意される。

2009年2月26日 ジュネーヴ、ジャック=ダルクロゼ音楽院で開催された会議にて改訂承認。

2010年11月10日 最終改訂と出版準備が Marie-Laure Bachmann と FIER の会長である Madeleine Duret に委ねられる。

本書第2版の改訂は、2015年にジュネーヴ、ジャック=ダルクロゼ音楽院で開催されたディプロマ会議で、Karin Greenhead と Louise Mathieu にゆだねられ、改訂箇所は拡大会議に Marie-Laure Bachmann, Silvia del Bianco, Madeleine Duret, Ruth Gianadda, Hélène Nicolet が加わり協議された。

この資料は2019年7月17日の Collège (最高協議会) 会議に於いて承認された。

第八節：引用文献

Jaques-Dalcroze, E., Remarques sur L'arythmie, *Le Rythme*, N°3, 1932.

Jaques-Dalcroze, E., Avant-propos (août 1919) , in E. Jaques-Dalcroze, *Le Rythme, la musique et l'éducation*, Ed. Foetisch Frères, Lausanne, nouvelle édition (1è éd.1920) , 1965.

Jaques-Dalcroze E., La Technique intérieure du rythme, in *La Musique et nous*, 1945, (cf. déjà in E. Jaques-Dalcroze, L'Education par le rythme, *Le Rythme*, N° 7, 1909) .

Jaques-Dalcroze, E., Le Rythme et l'Imagination créatrice (1916) , in E. Jaques-Dalcroze, *Le Rythme, la musique et l'éducation*, Ed. Foetisch Frères, Lausanne, nouvelle édition (1è éd.1920) , 1965.

Jaques-Dalcroze, E., L'Education par le rythme et pour le rythme, *Le Rythme*, N°7, 1910.

Jaques-Dalcroze, E., La Grammaire de la rythmique (préparation corporelle aux exercices de la méthode) , *Le Rythme*, N°17, 1926.

Jaques-Dalcroze, E., Lettre aux rythmiciens, *Le Rythme*, N°13, 1924.

Jaques-Dalcroze, E., La Rythmique, le solfège et l'improvisation (1914) , in E. Jaques-Dalcroze, *Le Rythme, la musique et l'éducation*, Ed. Foetisch Frères, Lausanne, nouvelle édition (1è éd.1920) , 1965.

Magill R. A., *Motor Learning and Control: Concepts and Applications*, 8th Edition, McGraw-Hill

付録 A

憲章

ジャック＝ダルクローズ音楽院 Collège (最高協議会)

前文

1948年6月25日、ダルクローズは彼自身の意志で、彼の息子である Gabriel Jaques-Dalcroze に、このメソッドが衰退することなく、効果的に維持され、発展する為の組織の設立を依頼した。そして Gabriel Jaques-Dalcroze の設立者として、またジャック＝ダルクローズ音楽院財団のアドバイザーとしての責任から、ディプロマ保持者による「ジャック＝ダルクローズ音楽院 Collège (最高協議会)」を設立した。

1986年11月18日の記録によると、Gabriel Jaques-Dalcroze は、必要に応じて Collège (最高協議会) が推薦する新しいメンバーを追加承認することは、ジャック＝ダルクローズ音楽院財団の責務であると示唆した。

現在 Collège (最高協議会) は、この憲章の責任と役割を認識しつつ、21名のメンバーで構成されている。

1. 目的

ジャック＝ダルクローズの意志を継承し、以下の責務を果たす。

- ・ダルクローズメソッドが、メソッドの存在理由である基本原理から逸脱することなく行われ、さらに発展するようなガイドラインを確立する。
- ・国際的に通用する公式な資格制度の為の規約を作る。
- ・資格取得試験の監督

第1項

創始者の精神の継承を見守る

第2項

ダルクローズの名称のもとに行われる指導の質を保証するために、情報の収集と必要な管理を行う

第3項

指導者に不公平な競争が起こった時、問題に対処する。

第4項

科学、技術のリーダー、そしてその他の関連分野の人々との交流を支援し、ジャック＝ダルクローズのメソッドをジュネーヴ、世界に普及する為にあらゆる手段を試みる。

2. 組織と事業

第5項

Collège（最高協議会）委員会は15～25人の委員で構成され、その中の一人はジャック＝ダルクローズの子孫であること。

第6項

Collège（最高協議会）委員は委員長を選び、またダルクローズ財団の会議へ主席する代表を指名する。

第7項

新しい委員の選出。候補者をダルクローズ財団の承認を取るために、財団に提案する。候補者が財団によって拒否された場合は、Collège（最高協議会）委員会は再度他の候補者を提案する。

第8項

Collège（最高協議会）委員は必要に応じて適切な方法でコミュニケーションをとる。原則的に2年に1度は会議を持つ。

第9項

Collège（最高協議会）委員でないエミール・ジャック＝ダルクローズの親族には、会議の情報が知らされ、Gabriel Jaques-Dalcrozeの希望により会議に参加することができる。

第10項

Collège（最高協議会）は定められた内部組織のないグループである。委員は活動に対する報酬を受け取らず、また会費を支払うこともない。然しながら、調査や作業部会を設置する場合がある。この場合はかかった経費の全額、または一部分がIJDより支払われる。

第11項

Collège（最高協議会）委員会の秘書的な仕事は、会長または他のメンバーがボランティアとして行う。連絡は経費を負担してくれる IJD を通して行う。

第 12 項

Collège（最高協議会）は重要事項、事業内容、特に支援を必要とすることに関して、口頭、または書面にてダルクローズ財団へ通知する。

ダルクローズ財団会長

Christine Sayegh

Collège（最高協議会）委員、会長代行

Martine Jaques-Dalcroze

ジュネーヴ 2004 年 4 月 21 日

現在の Collège（最高協議会）委員（2019 年現在）

Pablo Cernik, Gabriela Chrisman, Christine Croset, Silvia Del Bianco, Jeremy Dittus, Ruth Gianadda, Karin Greenhead, Paul Hill, Martine Jaques-Dalcroze, Murie Jaques-Dalcroze, Louise Mathieu, Sylvie Morgenegg, Sandra Nash, Hélène Nicolet, Catherine Oppliger, Lisa Parker, Toru Sakai

名誉委員

Marie-Laure Bachmenn, Madeleine Duret, Malou Hatt-Arnold, Mireille Weber

付録 B

Conditions d'utilisation de la Dénomination Jaques-Dalcroze (ou Dalcroze) , le 19 septembre 2018

La dénomination Jaques-Dalcroze ou Dalcroze qualifie la méthode d'éducation créée par le musicien et pédagogue Émile Jaques-Dalcroze (1865-1950) . Son usage est protégé par la loi en tant que marques DALCROZE et JAQUES-DALCROZE.

L'utilisation de la dénomination [Jaques-]Dalcroze est subordonnée à l'accord préalable écrit ou par e-mail de la Fondation de l'Institut Jaques-Dalcroze (IJD) de Genève (Suisse) . Cette fondation est chargée de vérifier le bien-fondé de l'usage du nom, tant auprès des institutions de formations professionnelles que des personnes individuelles dispensant un enseignement sous ce nom à des enfants, adolescents ou adultes. À cette fin, elle mandate les personnes compétentes (direction de l'IJD et/ou du département Rythmique JD de la HEM de Genève (a) , assistées au besoin de membres du Collège de l'Institut, qui est l'organe consultatif de la Fondation de l'Institut Jaques-Dalcroze.

Titres reconnus et homologués par la Fondation de l'Institut Jaques-Dalcroze aux plans national et international :

1. **Le Diplôme Supérieur de la méthode Jaques-Dalcroze** confère le droit de se dire représentant-e de la méthode intégrale de Rythmique, Solfège et Improvisation et de l'enseigner à tous niveaux ainsi que les cours y afférents (méthodologie, harmonie, plastique animée) . Ce titre ne peut être obtenu qu'à l'Institut Jaques-Dalcroze de Genève.
2. **Le Master en pédagogie musicale, orientation « Rythmique Jaques-Dalcroze » de la HEM de Genève, la Licence d'enseignement Jaques-Dalcroze et certains Certificats ou titres jugés équivalents par la Fondation de l'Institut Jaques-Dalcroze (voir la liste des titres reconnus à cet égard*)** , confèrent le droit d'annoncer ses cours sous le nom de [Jaques]-Dalcroze et d'enseigner la rythmique, la formation musicale (solfège) et l'initiation à l'improvisation instrumentale dans les écoles de musique, les conservatoires et les écoles publiques comme dans le cadre d'associations socio-culturelles ou de cours privés, à des enfants, adolescent-e-s et adultes amateurs (b) .

N.B. Le document l'Identité dalcrozienne (en annexe) définit les principes, techniques et contenus propres à l'exercice de la méthode Jaques-Dalcroze. L'aptitude à les transmettre tant par la pratique que par la théorie ne peut être validée que par la formation aboutissant à l'un des titres (1 et 2) ci-dessus.

Par ailleurs :

3. **Le Bachelor of Arts en musique et mouvement de la HEM Genève (certificat de premier cycle ou titre jugé équivalent par la Fondation de l'Institut Jaques-Dalcroze)** confère le droit d'exercer l'enseignement de la rythmique dans les écoles primaires et enfantines et les jardins d'enfants. Ce Bachelor ne donne pas le droit d'utiliser les dénominations DALCROZE et JAQUES-DALCROZE.

N.B. Il n'autorise en conséquence pas à ouvrir ou dispenser à titre personnel des cours portant le nom de [Jaques]-Dalcroze ni à se dire représentant-e de cette méthode.

4. **Le Certificat of advanced studies (CAS) ou Certificat post-grade** confère le droit

d'appliquer les principes de l'enseignement dalcrozien à sa propre spécialité (voir la liste des titres reconnus à cet égard*) . Ce Certificat ne donne pas le droit d'utiliser les dénominations DALCROZE et JAQUES-DALCROZE.

N.B. Il n'autorise en conséquence pas à annoncer ses propres cours sous le nom de [Jaques]-Dalcroze.

Enfin, **les attestations** délivrées lors de participation à des congrès, ateliers, visites d'observation, cours d'été ou master classes [Jaques]-Dalcroze, ne sauraient constituer à elles seules une autorisation d'utiliser les dénominations DALCROZE et JAQUES-DALCROZE et donc d'enseigner ou de se réclamer de la méthode Jaques-Dalcroze.

Les personnes autorisées à utiliser les dénominations DALCROZE et JAQUES-DALCROZE selon les modalités précitées, soit en fonction du titre obtenu, s'engagent à utiliser régulièrement ces dénominations dans le cadre de leur pratique professionnelle. Cet usage des dénominations DALCROZE et JAQUES-DALCROZE vaut usage des marques DALCROZE et JAQUES-DALCROZE par la Fondation de l'Institut Jaques-Dalcroze.

Formation professionnelle à la méthode Jaques-Dalcroze :

En ce qui concerne la formation professionnelle des étudiant-e-s aux méthodes dalcroziennes, ce droit n'est pas conféré aux institutions ou sociétés en tant que telles, mais *ad personam* aux titulaires du Diplôme Supérieur de l'Institut Jaques-Dalcroze de Genève (seule institution habilitée à décerner ce titre) , qui sont, de ce fait, explicitement autorisé-e-s "à enseigner intégralement la méthode Jaques-Dalcroze de rythmique, solfège et improvisation à tous niveaux, et à se dire représentant-e-s de cette méthode".

Toute personne diplômée de l'Institut est libre de proposer ou d'organiser à titre personnel des cours d'introduction à la méthode. Les attestations délivrées à ces occasions ne permettent pas à leurs détenteurs-trices d'utiliser les dénominations

DALCROZE et JAQUES-DALCROZE dans leur pratique professionnelle.

En revanche, lors de la création d'un cursus de formation certifiante, la personne diplômée doit travailler en lien étroit avec l'Institut Jaques-Dalcroze et obtenir une validation de ce cursus, afin de pouvoir utiliser les dénominations DALCROZE et JAQUES-DALCROZE.

La réglementation gouvernant l'utilisation de la dénomination [Jaques-] Dalcroze et des dénominations DALCROZE et JAQUES-DALCROZE stipule que les écoles ou centres désireux d'offrir une formation professionnelle et une certification en rythmique [Jaques-] Dalcroze doivent compter au sein de leur personnel enseignant au moins deux diplômé-e-s de l'Institut de Genève. Dans quelques cas particuliers, et en raison de circonstances exceptionnelles reconnues par l'IJD, un-e diplômé-e et deux licencié-e-s peuvent suffire. Toutefois, les étudiant-e-s devront recevoir au cours de leurs études l'enseignement de plus d'un-e professeur-e diplômé-e de la méthode Jaques-Dalcroze.

Les documents relatifs aux formations qui répondent à ces conditions, et qui sont certifiées par l'Institut Jaques-Dalcroze, sont munis du logo de l'Institut Jaques-Dalcroze.

La signature d'une convention lie les différentes parties et définit les modalités, compétences et responsabilités de chacun-e. La convention ne donne pas droit à une exclusivité territoriale.

Dans les centres de formation Jaques-Dalcroze, l'équipe d'enseignement professionnel dalcrozien doit comporter un-e diplômé-e à sa tête. L'engagement additionnel de titulaires d'une licence ou de professionnel-le-s d'autres disciplines (c) est laissé à l'appréciation de la direction (directeur-trice de la formation ou responsable du programme [Jaques-]Dalcroze dans une institution officielle) , en accord avec l'institut Jaques-Dalcroze. Tous les membres de l'équipe pédagogique sont sous la supervision du-de la diplômé-e responsable.

Dans le cas de formations certifiantes, les diplômé-e-s Jaques-Dalcroze sont les représentant-e-s des dénominations DALCROZE et JAQUES-DALCROZE en lien avec l'institut Jaques-Dalcroze, notamment en ce qui concerne les programmes d'études et leur évolution. Ils répondent de la formation dispensée, en tout lieu et en tout temps,

qu'il s'agisse d'une formation à plein temps ou d'une formation à temps partiel (cours de vacances, week-ends ou autres formes de suivi) . Ils ont la responsabilité de :

- ◆ planifier et superviser les programmes d'enseignement (contenus, durées, horaires, méthodes) ;
- ◆ assurer le niveau, la richesse et l'équilibre de la formation;
- ◆ établir les documents d'examens, les critères et les systèmes d'évaluation;
- ◆ rédiger les rapports de formation;
- ◆ choisir et faire appel à des enseignant-e-s additionnel-le-s pour les cours;
- ◆ veiller à la formation continue de l'équipe enseignante;
- ◆ se porter garants des enseignements ou autres responsabilités de formation déléguées à des non-diplômé-e-s dans le cadre de cours professionnels ;
- ◆ faire passer les examens et choisir les juré-e-s;
- ◆ guider et aider leurs collègues pour tout ce qui concerne les examens, les projets de développement et les procédures d'évaluation;
- ◆ assurer le développement et l'évaluation de la formation;
- ◆ signer les titres conférant la Licence ou le Certificat, conjointement avec d'autres co-signataires (selon les exigences locales) et avec la direction de l'institut Jaques-Dalcroze ;
- ◆ donner des instructions aux responsables de la communication et vérifier que les documents publicitaires et les annonces relatives aux cours de formation véhiculent une information correcte;
- ◆ adresser régulièrement à l'Institut Jaques-Dalcroze une liste mise à jour des personnes autorisées à se prévaloir d'un titre dalcrozien dans leur activité professionnelle;
- ◆ signaler à l'institut toute utilisation abusive du nom [Jaques-]Dalcroze ou des dénominations DALCROZE et JAQUES-DALCROZE dont ils auraient connaissance.

Les diplômé-e-s Jaques-Dalcroze ne peuvent pas autoriser des tiers à utiliser le nom [Jaques]-Dalcroze ou les dénominations DALCROZE et JAQUES-DALCROZE.

Par délégation de la Fondation, la Direction de l'Institut Jaques-Dalcroze, assistée de membres du Collège, vérifie et confirme que les titres attribués sont en accord avec les directives gouvernant l'usage du nom.

Sur préavis de la Direction et/ou du bureau du Collège, la Fondation de l'IJD peut mandater la Direction ou son-sa représentant-e pour aller se rendre compte sur place, et le cas échéant exiger les modifications jugées nécessaires.

L'Institut Jaques-Dalcroze se tient à la disposition des diplômé-e-s et des centres de formation et peut intervenir à leur demande en cas de conflits ou de situations problématiques, qu'elles soient internes (concernant la formation elle-même) ou externes –notamment pour le cas où des personnes non qualifiées prétendraient offrir une formation [Jaques-] Dalcroze. Il intervient s'il estime que les circonstances le demandent, et après les tentatives réalisées par les responsables locaux.

À intervalles réguliers, l'Institut Jaques-Dalcroze propose aux responsables de formations un espace de rencontre, d'échange et de supervision.

L'Institut organise, tous les 4 ans, des journées de formation continue (« Journées d'études ») qui s'adressent aux Diplômé-e-s et à certain-e-s professeur-e-s assistant-e-s qui enseignent dans les centres de formations. L'objectif de ces journées est d'inciter les professeur-e-s chargé-e-s d'utiliser les dénominations DALCROZE et JAQUES-DALCROZE à réfléchir et à échanger sur leur pratique, à intégrer des informations et de nouvelles connaissances qui permettront de faire évoluer la méthode Jaques-Dalcroze tout en restant fidèle à sa mission et à ses principes. Les Diplômé-e-s proposant des formations certifiantes sont tenu-e-s (d) d'y participer.

L'Institut Jaques-Dalcroze met à disposition des titulaires du Diplôme Supérieur de la méthode Jaques-Dalcroze une plateforme intranet afin de faciliter les échanges entre les centres, de partager des ressources pédagogiques et d'harmoniser les pratiques entre les différents pays. Cette plateforme contient des informations relatives aux centres de formation et met à disposition des forums de discussion. Elle est alimentée régulièrement par des ressources pédagogiques venant du monde entier.

Sur cette même plateforme, un espace séparé est aussi prévu pour tous les autres diplômé-e-s.

Les présentes conditions d'utilisation entrent en vigueur le jour de leur signature pour une durée indéterminée. Pour être valable, toute modification desdites conditions doit

être effectuée par écrit.

Commentaire explicatif des conditions d'utilisation de la dénomination Jaques-Dalcroze (ou Dalcroze) , le 19.09.2018.

Le présent commentaire a pour objectif d'expliciter les conditions d'utilisation de la marque Jaques-Dalcroze ou Dalcroze (ci-après "la marque jd") , afin de garantir une fidèle application par toutes les personnes et institutions intéressées.

- a. Le Conseil de Fondation de l'Institut Jaques-Dalcroze de Genève (ci-après ijd) est compétent pour désigner les personnes responsables et mandate pour vérifier le bienfondé de l'utilisation de la marque :
la Directrice de l'IJD, actuellement Madame Silvia Del Bianco et à défaut son ou sa suppléant-e.
- b. L'expression « adultes amateurs » désigne toute personne ne suivant pas une formation professionnelle dalcrozienne.
- c. Pour les branches en lien direct avec la méthode JD.
- d. En cas d'empêchement majeur, la personne demande à être dispensée par la direction.

付録 C

BIBLIOGRAPHIE PARTIELLE

- Bachmann M.-L., *La rythmique Jaques-Dalcroze: une éducation par la musique et pour la musique*, La Baconnière, Neuchâtel, 1984
- Bachmann M.-L., *Dalcroze Today*, Clarendon Press, Oxford, 1991
- Bachmann M.-L., *Trois conférences*, Institut Jaques-Dalcroze, Genève, 1999
- *Le rôle de la musique dans l'appréhension des notions de temps et d'espace* (1995) ;
 - *La Rythmique Jaques-Dalcroze, son application à des enfants d'âge préscolaire (et scolaire)* (1996) ;
 - *Emile Jaques-Dalcroze et son héritage* (1996)
- Berchtold A., *Emile Jaques-Dalcroze et son temps*, L'Age d'Homme, Lausanne, 2000
- Chosky L., Abramson R. M., Gillespie A. E., Woods D., *Teaching Music in the Twentieth Century*, Prentice Hall, New Jersey, 1986.
- Comeau G., *Comparing Dalcroze, Orff and Kodaly*, CFORP, Ontario, 1995
- Comeau G., *Comparaison de trois approches d'éducation musicale: Jaques-Dalcroze, Orff ou Kodály?*, Vanier: Centre franco-ontarien de ressources pédagogiques, Ontario, 1995
- Dutoit C.L., *Music Movement Therapy*, The Dalcroze Society, London
- Dutoit C.L., *Emile Jaques-Dalcroze, créateur de la Rythmique*, La Baconnière, Neuchâtel, 1965
- Haute École Musique de Genève (HEM) , *Pédagogie, art et science: l'apprentissage par et pour la musique selon la méthode Jaques-Dalcroze*, Actes du congrès de l'Institut Jaques-Dalcroze 2015, Dir., Silvia Del Bianco, Sylvie Morgenegg, Hélène Nicolet, Droz HEM : 2017

Greenhead, K., Habron, J., Mathieu, L., 'Dalcroze Eurhythmics: bridging the gap between the academic and practical through creative teaching and learning' dans *Creative Teaching for Creative Learning in Higher Music Education*, ed. Elizabeth Haddon and Pamela Burnard, Routledge: 2016

Jaques-Dalcroze E., *Rhythm, Music and Education*, Dalcroze Society Inc., London, 1921

Jaques-Dalcroze E., *Le rythme, la musique et l'éducation*, Foetisch frères S.A., Lausanne, 1921/1965

Jaques-Dalcroze E., "Physical Technique and Continuous Movements" in *Eurhythmics, Art and Education*, Chatto and Windus, London, 1930

Jaques-Dalcroze E., *Eurhythmics, Art and Education*, Chatto and Windus, London, 1930 reprint

Juntunen M.-L., *Embodiment in Dalcroze Eurhythmics*, Oulu University Press, Oulu, 2004

Martin F. et al, *Emile Jaques-Dalcroze: L'homme, le compositeur, le créateur de la rythmique*, La Baconnière, Neuchâtel, 1965

Martin F., *Ecrits sur la Rythmique et pour les rythmiciens, les pédagogues, les musiciens*, collection d'articles (1924 à 1965) , Editions Papillon, Genève, 1995

Mathieu L., *Un regard actuel sur la rythmique Jaques-Dalcroze. Recherche en éducation musicale*, n° 28, 2010, retrieved March 7, 2011, from http://www.mus.ulaval.ca/reem/REEM_28_Dalcroze.pdf

Mayor J.-C., *Rythme et joie avec Emile Jaques-Dalcroze*, Ed. Ketty et Alexandre, la Chapelle s/Moudon, 1996

PREMIER CONGRES DU RYTHME (1926) : *Divers articles en français et en anglais*, Institut Jaques-Dalcroze, Genève

Southcott J. (Ed.) , *Dalcroze Eurhythmics from a Distance, a miscellany of current research*, Turramurra, NSW, Heather Gell Foundation, Australia, 2007

TROISIEME CONGRES INTERNATIONAL DU RYTHME, 22-25 JUILLET 1999, *Le Rôle du rythme pour le développement humain*, Editions Papillon, Genève, 2000

SHORT LIST OF BOOKS WITH EXERCISES AND LESSONS / OUVRAGES CONTENANT DES EXEMPLES

D'EXERCICES OU DE LEÇONS

Aronoff F. W., *Music and Young Children*, Turning Wheel Press, New York, 1969

Aronoff F. W., *Move With The Music*, Turning Wheel Press, New York, 1979

Brice M., *Pédagogie de tous les possibles... La Rythmique Jaques-Dalcroze*, Editions Papillon, Genève, 2003; *en anglais* BRICE M., *The unfolding human potential... Dalcroze Eurhythmics*, Editions Papillon, Genève, 2004

Dale M., *Eurhythmics for Young Children: Six Lessons for Fall*, Musikinesis, 2000

Dale M., *Eurhythmics for Young Children: Six Lessons for Winter*, Musikinesis, 2001

Dale M., *Eurhythmics for Young Children: Six Lessons for Spring*, Musikinesis, 2002

Driver A., *Music and Movement*, Oxford University Press, London, 1936

Driver E., *A Pathway to Dalcroze Eurhythmics*, Thomas Nelson and Sons, London, 1951

FIER (Fédération Internationale des Enseignants de Rythmique) , M. Duret (Ed.) *Chemins de rythmique, Paths to rhythmic*, Editions Papillon, Genève, 2007

FIER (Fédération Internationale des Enseignants de Rythmique) , M. Duret (Ed.) *Chemins de rythmique 2, Paths to rhythmic 2*, Editions Papillon, Genève, 2014

Findlay E., *Rhythm and Movement*, Summy Birchard, Illinois, 1971

Gell H., *Music, Movement and the Young Child*, The Australian Publishing Company, Sydney, 1949

Gell H., *Heather Gell's Lessons*, CIRCME, Nedland, WA, 1997

Gell H., *Heather Gell's Thoughts*, CIRCME, Nedland, WA, 1997

Hoge Mead V., *Dalcroze Eurhythmics in Today's Music Classroom*, Schott, New York, 1994

Morgenegg S., *Initiation au piano par l'improvisation (I.P.I)* , Institut Jaques-Dalcroze, Genève.

POPE J. (Ed.) , *Dalcroze Eurhythmics: Movement through Music*, The Calloway Centre and the Heather Gell Foundation, Western Australia, 2005

PORTE D., *Et caetera, les débuts de l'improvisation au piano*, Institut Jaques-Dalcroze, Genève

SCHNEBLY-BLACK J., MOORE S. F., *The Rhythm Inside*, Rudra Press, Portland, Oregon, 1997

Vanderspar E., *The Dalcroze Handbook*, London, The Dalcroze Society Inc., 1984

Vanderspar E., *Manuel Jaques-Dalcroze. Principes et recommandations pour l'enseignement de la rythmique*, Institut Jaques-Dalcroze, Genève, 1985
Wahli-Delbos M., Del Bianco S., Gianadda R., Christmann G., *La rythmique Jaques-Dalcroze, un atout pour les seniors*, Editions Papillon, Genève, 2010; *en allemand: Die Rhythmik nach Jaques-Dalcroze, ein Plus für die Senioren*, Editions Papillon, Genève, 2011

FILMS

Dalcroze International Congress, Archive Film – Geneva 2007, Meerkat Films, Newcastle, 2007
La rythmique et l'âge d'or, ©ASPRYJAD, Association suisse des professeur-e-s de rythmique Jaques-Dalcroze, 2006
La rythmique chez les danseurs, ©ASPRYJAD, Association suisse des professeur-e-s de rythmique Jaques-Dalcroze, 2007
La rythmique, le solfège, un chemin vers la musique, ©ASPRYJAD, Association suisse des professeur-e-s de rythmique Jaques-Dalcroze, 2010
Orpheus and Eurydice, Video. University of Warwick, 1992
Rythmique, ©ASPRYJAD, Association suisse des professeur-e-s de rythmique Jaques-Dalcroze, 2004
Teaching Dalcroze Eurhythmics: Rhythmics for children, Resource discs 1 and 2, Meerkat Films, Newcastle, 2008
The Liberation of the Body: on the Traces of Jaques-Dalcroze and His Pupils, Film, Balance Film GmbH, Germany, 2001
The Movement of Music, Meerkat Films, Newcastle, 2005
Twenty rhythmicians worldwide speak: the essence of Dalcroze Eurhythmics, Tokyo, Japan: Jaques-Dalcroze Society of Japan, 2004

あとがき

2009年に発行されたダルクローズ ID 第1版は、仏語と英語の二言語から馬杉知佐、中明佳代、平島美保により邦訳され、日本ジャック＝ダルクローズ協会免許委員会（運営協議会）によって監修、編集後、2016年に日本ジャック＝ダルクローズ協会免許委員会より小冊子として出版されました。その後、2015年にジュネーヴで行われた国際大会に於ける会議で協議が重ねられ、その内容が反映されたダルクローズ ID 第2版が2020年に発行されました。

第2版は、特にダルクローズリトミックの専門的なトレーニングに於ける内容が強調されています。第1版の内容に対し修正、加筆もあり、第2版の邦訳を新たに行う必要が生じました。そこで免許委員会（運営協議会）のメンバー（井上恵理 酒井 徹 中明佳代 馬淵明彦 村中幸子）によって翻訳、監修、編集を行い、この度日本語版発行の運びとなりました。

本書の内容は、ダルクローズメソッドを詳細に学ぶことができる、今までにない大変貴重な資料です。多くの方々に読んで頂き、メソッドを正しく深く理解し、実践にあたっていただきたいと強く願っております。

免許委員会委員長 酒井 徹